

防空壕の思い出

長崎市 大浦 道子

小学校低学年時期は、食糧難はもちろんのこと、空襲から逃れることが先決であった。子供心に「戦争が早く終わってくれますように」と願う日々であった。空襲から逃れるには、防空壕に入って身を守らなければならなかった。

その防空壕も危険を避けるために、1ヶ所だけでなく、4ヶ所も転々とした苦い経験がある。私の家は、田んぼに囲まれた平地にあり、付近には山がない。私達の地区にも敵の飛行機B29の来襲が続くようになり、身を隠す安全な場所が必要になった。

1番目に避難した防空壕は、夏になるとよく近所の友達と泳ぎに行った川の岸にある川原に作られた防空壕である。防空壕というより、簡易の小屋といった方がよい。空襲から身を守るための一時凌ぎの仮小屋である。地区の人々が材木を持ち寄って支柱を作り、川石等を積みあげ、天井には土等を盛りあげて作ったものである。七輪などを真ん中にしながら、地区の人々と一緒に身を寄せ合い、敵の飛行機の音が遠くなるのをじっと待っていたものである。

空襲が激しくなると、簡易の防空壕では危なくなった。次の防空壕は、鉄道の踏み切りを渡っていく小高い山に掘られた防空壕である。しかし、民家より遠く離れていたり、水がたらたら流れ出した時、小虫が出現したりしたせい、ここでの防空壕生活は長く続かなかった。

3番目に逃げ込んだ防空壕は、鉄道の下を小川が流れている所である。鉄道は敵機も爆撃しないということで…。しかし鉄道の幅だけの長さが地区の人々の防空壕である。水がチョロチョロと流れている上に、竹を組んで座る場所だけを確保した防空壕である。

地区の世話役の男性の人の「警戒警報発令」のマイクの声聞きながらも、ぐずぐずしているといつの間にか「空襲警報」が発令になってしまい、「ほら逃げるとよ」「防空壕に行くとよ」「早く早く」と急かせられた。

「また、防空壕に逃げんば」と言葉にしたいが、戦争中のこと言葉に表すことはできなかった。その頃になると、昼夜の区別なく敵機来襲があり、昼間だけでなく夜もまた防空壕に入らなければならない日もあった。

夜は、とても辛かった。空襲警報発令になると、深夜が近づき眠くても、目をこすりながら逃げた。電燈も線香電燈でうす暗かった。さらに、明かりが周囲に漏れないように真黒い布で電燈を覆っていた。警報が発令になると、それも消燈しなければならない。もし、明かりが漏れていると「明かりが漏れていますよ」と見回りの人から注意を受けることになる。真暗い夜は、子供にとってなおさら、恐いものである。冬期でなくても、歯ががくがく震えて止まらなかった。

日増しに、来襲が多くなると、この防空壕も危ないということで、4番目に本格的な防空壕を、日本で働いていた韓国の男性に掘って貰う。家から、6、700m離れた墓地付近の山である。それは、穴を並列に2つ掘って、奥の方で両方の穴をつなぐ形である。一方の入口が爆撃され埋められても、

他方に逃げることができ、安心できるという防空壕であった。

さらに、敵機の来襲が増え、避難することが度々で、学校でも授業らしい授業になっていなかったようである。

その日も、空襲警報が発令になり、児童達は、家庭に帰宅させられた。私の家は、学校まで、23分の所である。（どうしたわけか未だに解らないが…）その日に限って帰宅が遅れてしまった。家に着くと、母親達の姿はもうなかった。私は急いだ。履物を脱いで居間にあがり、指定の場所に置いてある黒布で作った救急袋（防空壕へは必ず持って逃げる取り決めのある袋）を肩にかけ、頭にはもちろん防空頭巾を被り、ごさを巻いて右脇にして、裏口を出ようとした。すると、別棟の所で、祖父母が隠れながら空の様子をのぞいていて、私の姿を見つけると、「何しているのか」「敵の飛行機がもうそこまで来ているぞ」「早く逃げろ」と怒鳴られる。祖父母は覚悟を決めていた。自分達は、防空壕には逃げない、この家が爆撃されたら一緒に死ぬんだ、終わりだと…。

私は急いだ。防空壕のある山が向こうに見える。私はただ田んぼの中の道をたった一人で防空壕目がけて急いだ。みんな逃げてしまって、人の姿は全然ない。この世の中に自分一人だけが逃げているみたい。急ごうとするが、なかなか足が進まない。敵の飛行機の音は、もう自分のすぐ後方に聞こえてくる。

防空壕に行く途中に、いつも洗濯に行く大きな川があるが、きょうはそこまで、なかなかたどり着かない。敵の飛行機は自分の背中の上ではない、頭上を進んでいるようである。空を見上げる余裕などない。ゴーゴーゴーものすごい音。「怖い」「怖い」これ以上走れそうにない。目的地まで着きそうにない。「もう、だめだ」と思うと、道の右側には細い用水路があり、春から夏にかけて水が流れているが、運良く流れがない用水路の中に、ぱっと飛び降り避難した。

そして、教えて貰ったとおりに、両手の中指で両目を押さえ、両手の親指では両耳を押さえながら、狭くて泥のおいがする用水路の中で腹ばいになった。私の頭の上、身体の上をゴーゴーゴーものすごい爆音をたてながら進んでいるB29に「早く進んでいってくれ」「私の身体を見つけないで」と祈りつつ、たった一人で不安な気持ち一ぱいで伏せていた。数分間で通過したと思うが、私に取っては長い長い時間に思われた。

爆音が次第に小さくなってきたので、ちょっとだけ頭をあげて、前方の空を見上げるとB29が空一ぱいに横隊を組みながら、機体をヒラヒラさせ、きらきら光りながら東の山の方に遠ざかって進んでいっている。それを確かめると、被っていたごさを手早く丸め、みんなが待っているであろう防空壕へ、一目散に急いだ。走った。やっと着いた。

みんなが心配に心配をして、私の無事を待っていてくれた。そして、「よく無事で帰ってきたね」「恐かったやろうね」と、口々に慰めや喜びの言葉をかけてくれた。それを聞いた途端、恐かった出来事を一人だけで背負い頑張っていたことが、一度にはぎとられてしまい「ワッー」と大声を出して思い切り泣いてしまった。